



JIC インフォメーション

第 196 号 2018 年 4 月 10 日

年 4 回 1・4・7・10 月の 10 日発行

1 部 500 円

発行所: JIC 国際親善交流センター 発行責任者: 伏田昌義

<http://www.jic-web.co.jp>東京オフィス: 〒160-0004 東京都新宿区四谷 2-14-8 YPC ビル 7F TEL: 03-3355-7294 jictokyo@jic-web.co.jp

大阪・ロシア留学デスク: 〒540-0032 大阪市中央区谷町 2-7-4 谷町スリースリースビル 7 階 TEL: 06-6944-2341

ロシア・旧ソ連 国際交流誌

はりねずみのジェーニャ

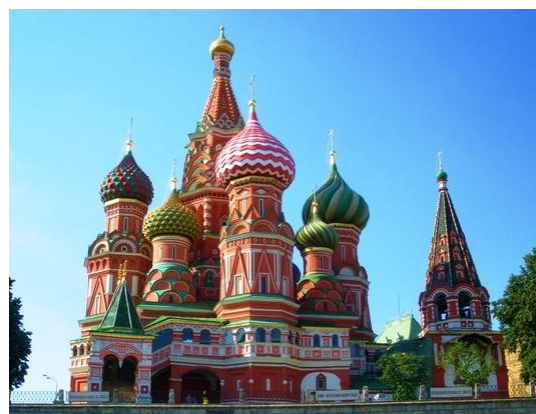


FIFAワールドカップ

ロシア大会 もうすぐ開幕！



サッカー・ワールドカップ ロシア大会がいよいよ 6 月 14 日から開幕します。日本は、予選リーグで対コロンビア戦（6 月 19 日サランスク）、対セネガル戦（6 月 24 日エカテリンブルグ）、対ポーランド戦（6 月 28 日ボルゴグラード）に出場します。この大会を機にロシアがいつそう身近なものになりますように！



<JIC ロシア セミナー2017>

ロシア革命 100 年 その文学的・思想史的背景

「文化の悲劇」「歴史の悲劇」

……亀山郁夫（名古屋外国語大学学長）……2P

モスクワ・ベルリン国際寝台急行

ストーリー（スイフト）号の旅……神保 泰興……13P

日本におけるロシア年・イベント情報 ……18P

イワノフカ村少年少女合唱団 招聘協力のお願ひ……20P

JIC では、Jクラブ(JIC 友の会)会員を募集しています。
年 4 回の情報満載のインフォメーションをお届けします。

JIC ロシアセミナー2017

昨年 11 月 18 日、東京にて JIC ロシアセミナーを開催しました。以下は、「ロシア革命 100 年、その文学的・思想的背景」と題してお話いただいた亀山郁夫先生の講演録です。2 月臨時号に掲載した藤本和貴夫先生の講演録は歴史と国際関係から見たロシア革命。亀山先生の講演録は文化・思想の面から見たロシア革命。併せて読んでいただくと、より立体的にロシア革命 100 年の姿が浮かび上がってくると思います。(編集部)



ロシア革命100年 その文学的・思想的背景

「文化の悲劇」「歴史の悲劇」

亀山郁夫 (名古屋外国語大学・学長)

今日は「ロシア革命 100 年～その文学的・思想的背景」というタイトルですが、私なりに“文化の悲劇、歴史の悲劇”というテーマに置き換えて、これから「ロシアの悲劇」について考えたいと思います。

JIC はご存じのようにロシア留学をサポートしている団体ですし、出来るだけ多くの人がロシアに行って学んでほしいという思いは私も変わりません。ですからロシアに対して暗いイメージを持ってほしくないという願いはあるのですが、でもやはりロシアがこの 100 年といわず 200 年の間に経験した悲劇的なものもしっかりと理解しながら、逆にそれをバネに「ロシアの喜び」をつかみ取ってほしいと念じております。

I ロシアとの出会い

『ロシア革命 100 年の謎』(河出書房新社)

『ロシア革命 100 年の謎』と題して沼野充義さんとの対談集を河出書房新社からこの 10 月に出版しました。「ロシア革命は善なのか、悪なのか？」という問題をめぐってかなり突っ込んだ議論をしました。3 月から 6 月にかけて 7 回にわたる対談を重ねてその内容をまとめたものですが、沼野さんがツイッターで「自分なりにこれほど力を込めて話した本は無い。普通の『ロシア革命 100 年』の本とは違うぞ」と宣言してくれました。沼野さんと私のそれぞれの人生におけるロシア体験といったものを踏まえながら、ロシア革命 100 年の意味について考えたわけですが、そもそも革命は善なのか悪なのかという二者択一的な考え方は、彼自身は「ない」と言うのですね。ところが私自身は、彼よりも 6 つほど年上ですが、むしろ善悪二元論的な視野の中でロシア革命というものを考え、ある意味ではその問題について悩んできたところがあるわけです。

これまで私はロシアについて専門書以外に 2 冊ほど本を書いています。一つは 2000 年に青土社から出した『あまりにロシア的な』という本です(その後、文春文庫に収録)。これは 1994 年に在外研究で 1 年間暮らした体験をもとにしたノ連崩壊後間もないロシアのドキュメンタリーです。私自身の個人的な人生を振り返りながら、国家崩壊後のロシアの現実についてまとめたもので、

私なりに気に入っている本です。もう一つは『偏愛記 ドストエフスキーをめぐる旅』(新潮文庫)。原題は『ドストエフスキーとの 59 の旅』で、日本経済新聞に 1 年間連載した記事を 1 冊にまとめたものです。これは新潮文庫始まって以来の短期間で絶版になった本なのですが、私にとってはとても愛着のある本です。この 2 つの体験記を通して、私がいま考えている「ロシアとは、ロシア革命とは何か」について話をしていきたいと思います。

ロシアとの出会い

私が最初にロシアと出会ったのは 1963 年だったと記憶しています。アンドレイ・タルコフスキー監督の『僕の村は戦場だった』(1962 年)という映画を観て感動しました。両親をナチス・ドイツ軍に殺戮された少年の復讐の物語なのですが、これは本当に痛々しい物語でして、最初にこの映画を観たときにものすごい衝撃を受けました。その後、これをもう一度観たいと思いつづけ、その念願がようやく叶ったのが、大学に入って 2、3 年経ってからのことだったと記憶しています。

その次のロシアとの出会いは 1965 年で、グリゴリー・コージンツェフという映画監督が作った『ハムレット』(1964 年)という映画です。高校 2 年生の時ですが、主演したアナスタシア・ヴェルチンスカヤという女優に夢中になり、ブロマイド写真をたくさん集めました。彼女がこの映画のプロモーションのために日本にやって来た時に、テレビのインタビューで彼女の姿に接しました。この時初めてロシア語の「ダー “Да”」という言葉を知った。どうもこれは、Yes という意味らしい。しかし、何か汚ない発音の言葉だなと思ったのですが、彼女が発音した二度目の“Да”の響きの美しかったこと。

ロシア文学との最初の出会いは、中 3 の時で、ドストエフスキーの『罪と罰』を池田健太郎さんの翻訳で読み、その 3 年後に『カラマーゾフの兄弟』を、さらにそれから 2 年後の大学 1 年生の時に『白痴』を、いずれも米川正夫さんの翻訳で読みました。そして 1970 年大学 3 年生のときに『罪と罰』をロシア語で 50 日間かけて読み通しました。これが大きな自信になりました。

私のロシア旅行の経験は 1974 年 7 月が最初です。25 歳でした。最初の 7 回は、すべて大学院生の時代で、旅行社の添乗員



としてロシアを回っていました。とても明るい素晴らしい記憶が残っています。大学の教員になってからは、いわゆる科学研究費とか国際交流基金等の助成金によってロシアに行きました。

旅行社の添乗員としては自慢話があります。あくまでも自慢話ですから、お気を悪くならさないでほしいのですが、あるときシベリア旅行から帰りにナホトカから敦賀に向かう船の中で、ある品のいい老人から「君は将来立派な人になるよ」って言われました。その人は「菊正宗」という酒造会社の社長さんで、戦後シベリアに抑留されて現地で亡くなった友達の墓参に行った帰りでした。その記憶を、私が東京外国語大学の学長になったときに日経新聞の連載記事の中に書いたんですね。するとその記事を読んだ菊正宗の社長さん(息子さん)が電話をかけてきて、「お会いしたい」と言う。それから半月ほどして、息子さんが学長室を訪問してくれまして、「父はつい最近死んで、この記事を読んでいるのが残念です」と言って、菊正宗のお酒をプレゼントしてくれました。ものすごく嬉しかった記憶があります。

1984 年の「原体験」

私のロシア体験を留学に絡めて言うと、ソ連崩壊を挟んでロシアで 2 度の長期在外研究をしています。最初はゴルバチョフ大統領が登場する前の 1984 年 4 月から 9 月までの半年間。当時は日本とロシアとの研究者の往来が年間数名に限られていて、政府間協定に基づく交換という形しか認められていませんでした。その年の 3 人のうちの 1 人に選ばれて、半年間行くことができた。それからちょうど 10 年後の 1994 年に、これはすでにソ連が崩壊してロシアとなった後ですが、こちらは国際交流基金の派遣で 1 年間の留学経験を得ることができました。

1984 年の留学の際に、母が 6 月 30 日に死んでしまい、結局母の葬儀に出ることができませんでした。留学半ばで一旦は帰ろうとしたのですが、恩師の原卓也先生から「帰ってくるな」と電話で言われました。「君がモスクワで貴重な時間を研究に費やすことがお母さんに対する最大の恩返しだから」と言うのです。恩師の言葉に従い、帰国しませんでした。帰国しなかったことで、母親を裏切ったような後悔の念にずっと苛まれたのですが、ところが不思議なことにその思いがあるとき反転するのです。肉親の死を看取らないということがある意味でとても大事なことのだということに気づいたのです。私は 6 人兄弟の末っ子ですが、私は今でも週に 2 度ぐらい母親の夢を見る。ところが、母の死を看取った 5 人の兄弟たちは誰も「母の夢なんて見ない」と言うのです。看取っていない私は、まだ心の中で母親が生きている。つまり死んだという実感が無いということで、私の中には今も母の記憶がずっと大事に残っているわけです。兄弟たちからも羨ましがられています。

この 1984 年の留学経験は、まだソ連がパペストロイカを迎える前で極めて保守的な暗い影を背負った時代ではあったのですが、反面そこに生きている人たちの顔の表情の輝きには驚くべきものがありました。お金の概念というものが無いのです。これぐらい純粋に友情という言葉信じている人たちはいないのではないかなと思うほどに、彼らは人との出会いとか心の触れ合いというものを大事にしていました。グローバル化が進んだ現在からは想像がつかない素晴らしい黄金時代がここにありました。ソ連時代というのは、一面では、民族友好、友情という絆で結ばれた本当に偏見のない世界だったのです。

ただし、残念ながらこの留学の間に、私はもう一つ辛い経験をしました。ちょうど 8 月の中頃のことで、私は研究のために訪れた旅先でスパイ容疑で捕まってしまったのです。その経緯については、詳しくは先ほど紹介した 2 冊の本に書いています。ただ、この時スパイ容疑で捕まった経験が私にとって百倍くらい大きな糧となって帰ってきました。過去 15 年におよぶドストエフスキー研究、あるいはその前スターリン文化研究も、すべてこの逮捕の経験をばねにしてきました。

逮捕を経験し、私も完全にブラックリストに載ったという実感を持ちました。というのは、帰国して間もなく大学の主任から呼び出され、「ロシアで何があったのか?」、「ソ連大使館から問い合わせが来たよ」と質問されたのです。その時には、もう二度とソ連の土は踏まないと決意していたのですが、ゴルバチョフの登場でそうした厳しさが全体にかなり緩み、その後も現地に行けるようになったわけです。ゴルバチョフの登場とペレストロイカをだれよりも喜んだのは、この私ではないかなと思うほどです。3年前に『ゴルバチョフに会いに行く』という本を作ったとき、その率直な思いを元ソ連大統領に伝えました。

1990 年の 2 月 10 日にノーベル文学賞の受賞者であるボリス・パステルナークの生誕 100 年のお祝いがあり、1993 年には詩人ウラジーミル・マヤコフスキー生誕 100 年の記念式典があり、この 2 つの式典に招待されてモスクワを訪問しました。ここで面白いパラドキシカルな現象を経験しました。パステルナークはある意味で反ソ的な詩人・作家であったわけですが、彼の生誕 100 年はソ連崩壊の直前で、そうした反ソ的な詩人をむしろ前向きに受け入れる空気があり、なんとボリショイ劇場で式典が開かれたんですね。錚々たる政治家たち、世界の芸術家たち、俳優のリチャード・ギアとか作家のアーサー・ミラーといったパステルナーク・ファンの人々が集まって盛大に記念式典が行われました。ところが、もしソ連が崩壊していなければ、まさにボリショイ劇場で開かれるべき革命詩人ウラジーミル・マヤコフスキーの生誕 100 年記念式典は(1993 年です)、本当にみすばらしい、ある小さな研究所の食堂でごくささやかに行われました。3 年早く生まれていたら、運命も変わっていたらと思います。ソヴィエトを讃えた革命詩人は惨めな 100 年を祝い、ソ連を批判した作家はボリショイ劇場で盛大に祝われた。ソ連崩壊後は、至るところでそういうパラドキシカルな状況が生まれていました。

さて、いよいよロシアとは何かという問題に入りたいと思います。

II. ロシア精神を考えるキーワード

ロシア革命の話をする前に、「ロシアとは何か」ということを、い

くつかのキーワードを使って紹介しておきたいと思います。

霊性 “Духовность”

まず第一は、「霊性」= “Духовность” (ドゥホーヴナスチ) という言葉です。このドゥホーヴナスチというのは、先ほどソ連時代のロシア人とつきあって「お金の観念が全然ない」と言いましたが、人と人がまさに心と心、魂と魂で繋がっているような、そういう微妙な感覚をドゥホーヴナスチと私は呼んでいます。このドゥホーヴナスチが分からないと、ことによるとロシアの文学や芸術は全然分からないかもしれない。政治も分からないかもしれないと思うところがあります。

ロシア理解の根底には、「ロシアというのは分からないものだ」という一種の不可知性があるとよく言われます。ここに一編の詩があります。19 世紀の外交官で詩人のフォードル・チュッチェフという人が書いた有名な詩です。

Умом Россию не понять,
Аршином общим не измерить:
У ней особенная стать —

В Россию можно только верить. — Тютчев (1866)

「知もてロシアは解しえず、並の尺度では測りえず、そこに独自の気質あり、ロシアはひたぶる信じるのみ」

チュッチェフは、ロシアは頭でそれを理解しようとしても絶対に分からない。普通の尺度で測ろうとしても測りえない。そこには独自の気質というものがある、ロシアというのはひたすら、本当に信じることでしか理解できないという意味ですね。信じることでしか理解できないというのは、おそらく“愛すること”と同義だと思います。いわゆる“共感力”とも言うのでしょうか。私がこのチュッチェフの詩を解説する時にいつも思い浮かべるのは「あばたもえくぼ」。あまり品のよい言葉ではないのですが、好きな人の頬にちょっとした黒子があったりして、普通の人にとっては単なる黒子にしかみせませんが、愛する人にとっては本当に可愛らしさのシンボルとなったりする。つまり主観とはそういうものであって、先ほど主観の恐ろしさということを少し言いましたが、何かに主体的に、主観的に関わることを通して初めてロシアは姿を現してくる。客観的に、分析的にロシアを見ようとしても、どこかそこから大きくはずれてしまうものが出てきて、ロシアというのは言葉では捉えきれないということです。

信じることを通して繋がっているということは、別の見方をすれば、ロシア人には批判的な精神が欠如しているのではないかなと思えるところがあります。それは、例えば昨今のプーチン崇拜や、たとえば、根強いスターリン人気などがそうです。ロシア人たちは、一見、批判的精神を非常に低いものとして見下しているところがあるような気がします。ところが、19 世紀から 20 世紀にかけてこの 200 年の歴史の中でロシアには、じつにすばらしい風刺文学の伝統があるわけです。ゴーゴリ、チャーホフ、ドストエフスキーもそうですし、20 世紀では、ゾーシチェンコという人もいます。ここはロシアの精神性を考えるうえでの謎です。批判精神が旺盛でありながらなおかつ体制順応型のようなどころがある。他方、この体制順応型というのは、批判的精神の欠如を補って余りある“愛し合う心”と裏腹の関係にあるわけです。ドゥホーヴナスチ=霊性を共有するところにあると思うのです。

霊性と言葉

このドゥホーヴナスチ=魂で繋がっているというこの感じはどこから来るのかと考えたときに、それは「ロシア語そのものなのではないか」と思うわけです。これは沼野さんとの対談で意見が対立した部分でもあるのですが、ロシア人というのは“言葉の民”で、ロシア語を発するという行為の中におそらく素晴らしい快感を覚えているんですね。でなければあれほどの素晴らしい詩は生まれません。私たちは日本語を話すことに誇りを感じたり、喜びを感じたりすることはあまりないと思うのですが、ロシア人というのは、ことによるとフランス人に劣らないくらい、ロシア語を発するという行為の中に得も言われぬ快感や快楽を経験しているのかもしれない。

というのは、ロシア語の一つひとつの言葉の意味のレンジ、広がりというものがものすごく大きいのです。ドストエフスキーの翻訳は 7 種類か 8 種類ありますが、訳によって全然違う部分がある。なぜそういうことになるかというと、ロシア語の言葉の意味の広がり、訳者によって解釈が異なってくるんですね。では、それでも作者は一つの意味でしか使っていないのではないかなと思うかもしれませんが、そうではなくて作者も一つの意味だけでなくいくつかの意味を込めてその言葉を使っているところがある。そこからロシア文学にいくつもの翻訳が現れるという現象が生まれてくるわけです。

ここに“Тоска” (タスカー) という言葉を取りあげてみます。タスカーというのは「憂鬱、憧れ、郷愁」などと訳されますが、総じて、寂しい気分や故郷を思う懐かしさ、あるいは病的な鬱状態から自殺寸前の苦しい気分、それらを全部タスカーという言葉で引き受けてしまうわけです。例えば、1 人のロシア人が「タスカー」という言葉を吐いたときに、その言葉を聞いた人たちはその意味を推し量るわけです。どういうタスカーなのか。その人はどういう状態で、単に故郷を懐かしがっているだけなのか、死ぬくらい激しい鬱病なのか。タスカーという言葉のレンジを推し量る。そこに“霊性”つまり意味を汲み取ろうとする精神の働きが生まれる。「阿吽の呼吸」や「暗黙の理解」という言葉に通じる、深いところで理解し合っている部分があるわけです。そこから人間関係の中におのずと一種の共同体的な感覚が生まれてくる。それは全体主義にも繋がっていく。そういう道筋になっているのです。

革命か、霊性(神)か

そうしたロシア人の霊性=ドゥホーヴナスチというものを介したコミュニケーションの取り方、あるいはお互いを許し合う感覚、そういった慣れ合い主義的な精神性というものを、20 世紀を代表するユダヤ人作家であるワシーリー・グロスマンは、“奴隷の心”だと言うわけです。『万物は流転する』という小説では、「ロシア人は 1000 年の奴隷だ」とまで言います。1000 年というのは、ロシアが 1000 年前にキリスト教を受容してから現代に至るまでという意味です。彼らはずっと何かある大きな力の奴隷として生きて来たと言う。これは先ほどの批評的精神の欠如ということにも結びついて

きます。

ところが、言葉のレンジが広いということは、それを支配する人間の力も偉大なるものがあるわけで、当然のことながら、詩人というのは人々の心を領有する強力な力を持っている。したがって、貧しい言葉しか持たない政治家たちは皆、そういった詩人が持つ力を恐れることにわけですね。亡霊を恐れるように言葉を恐れるところがある。ニコライ 1 世はプーシキンを謀殺しますし、スターリンは何人も芸術家や詩人をやはり謀殺しました。

そうした霊性＝ドゥホーヴナスチという問題に対して、これではいけないという動きもロシアには当然ある。ロシアの思想史にはいわゆる“西欧派”と“スラヴ派”の二つの思想潮流があります。西欧派は、西欧的な合理主義的な思考こそがロシアの将来を開く道なのだという考え方で、いや、まさにこの霊性こそがロシアの未来を開くのだというのがスラヴ派です。

もしこの霊性によって 20 世紀あるいは 21 世紀の未来が開かれていくとするならば、ロシアはものすごい精神的なユートピアを作っていたことになる。それがソヴィエト社会主義やスターリン主義に置き換わっていくわけですが、革命というのはこの西欧派による、西欧的な合理主義の力によってロシアを変革しようとした人たちの考え方です。ドストエフスキーはまさに革命的な力と霊的な力によって、ロシア人の心を治癒しながら育て秩序ある世界へと導こうとして、その二者択一の中で苦しんだ。『罪と罰』の主人公は Родион Романович Раскольников ロディオン・ロマーノヴィッチ・ラスコーリニコフです。江川卓先生は、頭文字の“エル・エル・エル (PPP)” の 3 つをとって、これは反対にすると“666”で、ラスコーリニコフこそまさに悪魔の化身なのだという解釈を下したのですが、それはまさにその通りです。つまり悪魔というのは、ロシア人全体が持っているある種の共同体的な感覚すなわち「全一性」を切り裂いていくもので、それが合理主義であり、革命なんですね。そういう二者択一的な世界観の中でドストエフスキーは苦しんだということです。

二重信仰 “Двоеверие”

ロシア精神を考える第 2 のキーワードは、「二重信仰」“Двоеверие” (ドゥヴァエヴェーリエ) です。

ウラジーミル 1 世によってスラヴの大地にキリスト教が入ってきます (988 年)。それ以前はいわゆるスラヴ異教の世界でした。八百万の神々がいた。そこにキリスト教が入ってくる。キリスト教の宣教師たちは異教の神々の概念を使いながら、キリスト教を普及させていくわけですね。ということでロシアのキリスト教は、純粋なキリスト教的なものと異教的なものとがミックスして独自の形態が出来上がる。これを二重信仰と呼びます。

もう一つは、17 世紀の中葉にロシア正教会が真っ二つに分裂して、正統と異端とに分かれます。正教会の典礼の仕方を変えようというニコンの改革が行われ、十字を切るのに二本指で切るか三本指で切るかといった細かい典礼儀式をギリシア正教風に一元化しようとした。古いしきたりを守ろうとする人たちはこの改革に猛烈な反対をして、ここでいわゆる「分離派」(古儀式派)が登場します。『罪と罰』の主人公ラスコーリニコフは、“Раскольников” (ラスコーリニキ) = 分離派を意味しています。当然、ラスコーリニコフは現存する伝統的なロシア正教会に対立する者として寓意されていることを把握しなければなりません。

ソボールノスチ(全一性) “Соборность”

次のキーワードは、“Соборность” (ソボールノスチ)。これは「全一性」という意味です。ロシアの宗教哲学者ニコライ・ベルジャエフは「ソボールノスチとは、精神 (霊) に目覚めた人格と人格の自由な良心に基づく交わりである」と言っています。良心というのはよく分からないのですが、霊と霊でつながること。それが全一性だと言うのですね。

ヨーロッパ的な考え方では、逆に霊と霊が切り離されたところで初めて人間というもの、個人が自立すると考える。しかしロシア人はそうではないのです。例えば、皆さんは今ここで私の話を聞いています。ロシア革命についての私の話を聞いて、その時にはほとんどの人が大体同じことを考えていると思うのです。ところが話が終わって、皆さんがここから外に出た時にはもう他のことを考えている。ヨーロッパ的な合理主義ではまさにドアを出た瞬間に個の自立というものが始まるわけですが、ロシアの正教会の人たちの考え方は正反対なのです。例えば私が司祭で讃美歌を唱えて皆さんが後から歌うという場面を想定して、その心を溶け合わせた瞬間に、個としての自立が完成するという考え方なんですね。全く逆の考え方をする。そういう考え方をソボールノスチと言います。言いかえれば、これがロシアで 19 世紀の長い農奴制を生み、20 世紀の全体主義を生んだ大きな精神性と言っているのかもしれない。

ケノーシス(自己犠牲) “Ке́но́сис”

“Ке́но́сис” (ケノーシス) という言葉も覚えておきましょう。これはキリスト教の用語ですが、イエス・キリストはこの地上に現れる時に、自らを虚しゅうして人間と同じ姿をとって現れた。人の姿をとるということは神の僕 (しもべ) となることを意味するわけです。自らを卑しくし、そして十字架の死に従った。つまりロシア人は、神の子であるイエス・キリストが僕となって十字架上で磔になったということの中に自分自身の精神性を同化させて自己犠牲というものを学ぶんですね。

先ほど 17 世紀の半ばにロシア正教会が二つに割れて正統

派と異端派に分かれたと言いましたが、この時代にもう一つさらにラディカルな異端派で、いわゆる“セクト”と呼ばれる人たちが現れます。全く独自の戒律でもって聖書を解釈し、神の信仰を得ようとする人たちなのですが、彼らは例えば 1666 年とか 1699 年とか、“666”という数が出てくる年に集団で焼身自殺をする。つまり世界に終末が訪れる。神の裁きが下される前に、自らを犠牲にして天国に身罷ろうという思想なのです。自分の身体を焼くというのはまさにイエス・キリストの十字架における苦しみと同一化するということで、それによって神に近づくという非常に過激な精神性を持った人たちなんですね。以前、佐藤優さんと対談をして『ロシア—闇と魂の国家』(文春新書)を書いたとき、このケノーシスをめぐって議論しました。「なぜロシアと日本は精神的につながるのだろうか」というときに私が「ケノーシス」と言ったら、彼は「いや、カミカゼだよ」と言った。神風の特攻精神というのはロシア人の自己犠牲の精神に非常によく似ていると彼は言うわけです。第二次世界大戦でソ連(ロシア)では 2700 万人が死んでいる。ドイツは 700~800 万人です。2700 万人の死者というのは尋常ではない。命の重さがこれほど軽いのは、そこに自分自身を何か大きなものの犠牲にすることに喜びを見い出すような精神性があるということです。

「終末の民」(ベルジャーエフ)

批評家の言葉も挙げておきます。「終末の民」と言ったのは宗教哲学者ベルジャーエフです。「ロシアの民衆は、その精神構造からして非政治的であって、そのめざすところは歴史の終末、つまり神の王国の実現である」と彼は言います。

新約聖書の『黙示録』には世界の終末が描かれています。ドストエフスキーの登場人物はこの『黙示録』が大好きです。『白痴』の主人公ナスターシャ・フィリッポヴナはすごい『黙示録』論者ですし、レーベジェフというおしゃべりな男も『黙示録』論者です。イッポリートという結核を病んだ人も『黙示録』論者。つまり世界に終わりがくる、それも近々終わりが来る。その時、最後の審判が行われ、イエス・キリストが再臨し、「神の国」が到来するという考えです。ロシア人というのは全体としてこの終末に対する憧れを持っている。世界に終わりが来て、新たな神の国=ユートピアが実現するという願望ですね。それがロシア人の中に非常に強くある。この「終末の民」という言葉も覚えておいてください。

「形式憎悪」(または「ブリコラージュ」)

もう一つ、「形式憎悪」というのがある。ロシア人というのは形式的なことがすごく嫌いです。それは霊性というものと形式というものがやはり相反するからですね。形式的なものを蔑視するというのが、ロシアの芸術・文化の特質の一つとして挙げられる。ロシア人は形式よりもむしろ即興、奔放さといったものを非常に愛するところがあります。



関連して、「ブリコラージュ」“Bricolage”という言葉があります。これは文化人類学者のクロード・レヴィ＝ストロースよく使う言葉ですが、「手仕事」「寄せ集めて自分で作る」といった意味です。日本人は、例えば料理を作る時には一応レシピを見て、材料を揃えて、ある程度計画立てて作っていくわけですね。ロシア人はそういう計画にとらわれずに、何か偶然できてくるものが好きなのです。何か食べたいと思ったら材料を適当に集めてきて、そもそも貧しい国ですから材料を完全に揃えることはまずできない。だからあり合わせのもので食べる。あり合わせのもので作るというのがロシア精神の根本にあります。そこから新しい科学が生まれてくる。あり合わせで作るものの中からいろいろな創造的要素が生まれるわけです。それが大事なんです。このブリコラージュ=手仕事というのもロシアの精神の一面を表わしています。

ベッソフシチナ(悪魔つき) “бесовщична”

ロシア精神を考えるキーワードで、これは私が非常に好きな言葉です。“бесовщична”(ベッソフシチナ)。“Бесы”(ベースィ)は悪魔という意味なんですが、ベッソフシチナはいわゆる「悪魔つき」。一種の異常な興奮状態にロシア人は入りやすい。危険だなんて思わないでください。これは霊性とこれまで呼んできたものの極限状態といいたししょうか、霊的なもの、精神的なものが灼熱して、一種の興奮状態に入った状態がベッソフシチナです。悪魔つき、あるいは神がかった状態、シャーマニスティックな状態です。シャーマニズムはシベリアが発祥地ですから、そのシベリア的なものがタタールやモンゴルと一緒にヨーロッパに近づいていって、ロシア人の中に精神的な遺伝子を残していったのかもしれない。

ウオッカ “Водка”

最後は“Водка”(ウオッカ)です。なぜこんなところにウオッカを出すのか。私は 1994 年に一年間ロシアで暮らしたときに、まだ 45 歳と若かったので、本当に毎日ウオッカを飲みました。つくづく感じたことは、ウオッカというのはロシアの神なんだということです。

「ウォッカはロシアの神なり」これは現代ロシアの作家ヴィクトル・エロフエエフの言葉です。ウォッカを侮ってはいけません。たくさん飲んではいけませんという意味ではありませんよ。つまり、ウォッカという存在がいかにロシアの歴史、ロシアの精神性において重大な役割を果たしてきたかということが、ドストエフスキーの小説を読めばすぐに分かります。どの主人公も猛烈に飲んでいる。ものすごい陶酔とものすごい苦しみを体験しています（二日酔いとも言います）。この言葉を書いたエロフエエフがエッセイで引用しているのはアフガン戦争です。1979 年 12 月にソ連軍がアフガニスタンに介入して 1989 年まで 10 年間続いた戦争ですが、その犠牲者が 14000 人。ところがロシアではアルコール中毒で死ぬ人が年間 30000 人いる。なおかつロシアにおける犯罪で、殺人事件の 7 割はアルコール絡みなんですよ。それぐらいウォッカ＝アルコールというものがロシア人の精神性を支配し、蝕んでいる。そこからまた様々なイマジネーションが生まれ出てきているということです。

Ⅲ. 私の 1 Q 8 4、主題の発見

再び 1984 年の「原体験」

さて、いよいよ今日の主題に入りましょう。

私にとってロシア革命というのは、1984 年にソ連で経験した逮捕事件に尽きてしまうところがあります。私は 1984 年 8 月 15 日にレーニンの故郷ウリヤノフスクという町で、スパイ容疑で拘束されました。逮捕の直前に銃を突き付けられ、取り調べ中に「君はあの場で射殺されても文句は言えないよ」と脅された。「お前は日本のスパイじゃないか」と疑われ、何度も何度も繰り返し追及される中で、ある種の精神的なスポットに迷い込んだのです。疑われるということは、自分への疑いを誘導する。疑われるということは、たとえ自分が潔白だと思っていっても、どこかにやましい気分が生まれてくるものです。そのやましい気分が、拷問を含めて何度も疑いをかけられることによって、最初は本当に微かなものが徐々に膨らんでいって、最終的には自分自身が疑念・疑惑に対して同化していく心理状態になるわけです。

私は取り調べ中に「君は日本政府からいくらお金をもらっているんだ？」と訊かれた。「もらってません」と答えたのですが、よく考えてみると日本学術振興会から月に何十万円というお金をもらって留学にしているわけです。それをルーブルに換算して、「奨学金として〇〇ルーブルもらってる」と言ったら、内務省の取調官は「ほら見たことか。君はスパイじゃないか！」と言う。私は「これは学問研究の奨学金だ」と思うのですが、「日本政府が私をロシアに派遣したのは、ひょっとすると諜報活動を要請していたのではないか」と思ったりもするわけです。私は当時、ヴェリミール・フレーブニコフというロシアの未来派詩人の伝記研究をしていたの

ですが、じつは国家が私に要請しているのは、それとは別のさまざまな情報収集なのではないかというふうに疑い始めてしまったんですね。

ともかく、旅行先で捕まった経験は恥ずかしくて人には言えません。さらに、知人友人たちに迷惑がかかることを恐れて、とくにロシア人には迷惑をかけたくなかったのも、ロシア人の友人たちとは一切連絡を絶ちました。ただ 1 人、私が信頼する先輩の O 氏にだけはこの事件について告白しました。彼はソヴィエトの農業集団化を研究していたのですが、1920 年代の終わりから 30 年代の農村における飢餓の実態を調査していた。同時に、当時の農村地帯でスターリン独裁に対する批判的な言動はなかったかという調査もしていました。その彼が私どう言ったか、ちょっと資料を読みます。

『O 氏とのやりとりの中で、ウリヤノフスクでの事件以降、私が経験した奇妙な自己分裂について告白した。他人に疑いを持たれることの恐ろしさとは、人間がその疑いに自分から進んで同意しようとする不可解な衝動にある。いったんスパイの嫌疑をかけられた人間は、嫌疑それ自体によって逆に自分がスパイではないかとの自己暗示に陥っていく。』

すると O 氏は、スターリン時代にスパイ容疑で粛清された政治家にその話を重ね合わせ、こう解説してくれた。あの恐ろしい時代（1930 年代後半の大テロルの時代）、最終的に無実の罪を自白した人々は、ある根源的な部分で「罪」を自覚していたのかもしれない。自白は巧妙な尋問や厳しい拷問だけが理由ではなく、社会主義という至高の理念に照らし、自分を徹底的に罪深いと感じた結果かもしれない、と。』

「社会主義の神」に対する罪の意識

キリスト教でいう「原罪」という言葉をご存知ですね。すべての人間は出発点で罪を犯している。その罪を全部引き受けて自ら犠牲になったのが「イエス＝キリスト」であるわけですが、私たちは皆、クリスチャンであれば原罪を思い、クリスチャンでなくても自分を罪深い人間だと思っている人は少なからずいると思うのです。自らを罪深いと感じる人は必ず神という存在を自分の中に持っている。

1930 年代にはスターリンとともにロシア革命を率いた革命家たちが全員粛清されてしまいます。スターリン以外の全員がスターリンの犠牲になります。彼らは自分の罪を自白していくわけです。無実の罪を告白したと思うかも知れないですが、実際のところ彼らはあるやましさを体験する。20 世紀のソ連における神とは社会主義ですから、社会主義の理念に照らして自分は何か悪いことをしなかったかという思いがどこかにある。スターリンに対してではなくて、社会主義という理念に対して、自らの罪を思い起こすわけです。たとえば何か私腹を肥やそうと一瞬思った経験は誰でもある。人間の最も根源的な部分にあるある種の欲望や欲求といったものは全部罪深いものなので、それがキリスト教の神ではなく社会

主義という神に照らし合わせるときに必ず罪の意識が生まれてきて、最終的に自分は罪を犯しましたという言葉を出してしまう。そういうことがあったのではないかということなのです。

社会主義は一つの神なのです。ヴォルガ川中流域のウリヤノフスクという町で私は捕まったわけですが、橋の向こうに重要な戦略基地があった。それを知らずに橋を渡ろうとした私を、歩哨所で見張っていた兵士が出てきて銃を突きつけて拘束したのです。歩哨所でまず取り調べを受けて、ウリヤノフスクの内務省で2度目の取り調べを受けました。取り調べをうけている間に、だんだん自分はスパイではないかという気になってきて、取り調べから解放されてこの町にあるレーニンのメモリアルに行くときには、自分はここにあって本当に罪深い、汚れた人間だと感じました。驚くべき体験です。

ウリヤノフスクから次にヴォルゴグラード（旧スターリングラード）へ行きました。第二次世界大戦の勝利を記念してつくられた巨大なママエフの女神像を前にした時も、本当に罪の意識で倒れそうになるくらいの苦しさを経験しました。激戦地スターリングラードの戦いでは、膨大な人々が亡くなった。当時の人口 60 万人のうち、ドイツ軍との戦いが終わった時には 6000 人しか残っていなかったと言われます。ほぼ全員が、祖国、社会主義、ソ連を守るために戦って死んでいる。社会主義の神のために犠牲になった人びとの霊をささげた女神像の前で、私が自分を罪深いと感じたその理由というのは、こういうことだったんです。1つは、この旅行へ出る直前にある商社に勤めている知人が、旅先への土産としてくれたのが何と女性のヌードのついた名刺大のカレンダーだった。10枚くらい持って行った。これがまず罪の意識を刺激しましたね。もう1つは、モスクワにいたときに知人からルールを闇で買った経験がありました。そういう行いの1つ1つが意識のなかでだんだん膨らんできて、ものすごい罪の意識の自覚に向かっていったということなんです。

ロシア革命 200 年(前史)

さて、いよいよロシア革命の話です。ロシア革命 100 年といっても、実際は 200 年の歴史です。ロシア革命というのは 1917 年から 18 年にかけての出来事ですが、そこから時間軸を 100 年進めると現代に至ります。しかし、時間軸を必ず現在に近づける必要はなくて、逆に過去に遡及させる時間軸もあってしかるべきです。1917 年のロシア革命というのは一つの奇跡的な事件であって、奇跡は偶発的に起こるのではなくて、歴史的な蓄積の結果として奇跡が起こるわけですから、その蓄積の部分もまさにロシア革命であり、また革命が成就した後の破綻に至るまでの崩壊のプロセスもまたロシア革命なのです。

1812 年のナポレオン戦争で、ナポレオンを追撃していったロシアの将校たちが西側の国々を見てロシアがいかにも立ち遅

れているかを知る。帰ってきた青年将校たちが 1916 年にロシア救済同盟、1918 年に福祉同盟といった秘密結社を作る。そして 1825 年にデカブリストの乱を起こします。これをニコライ 1 世は徹底的に弾圧する。いわゆるニコライ 1 世の反動の時代があらわれて、1837 年にはプーシキンが謀殺されます。その 12 年後にペトラシェフスキー事件というのが起きます。これはヨーロッパの 1848 年革命（フランス二月革命をはじめ、ドイツ、オーストリア、ハンガリー、イタリアなどでの一連の革命運動）に触発されたロシアの若い知識人たちがペテルブルグで起こした事件です。この事件にドストエフスキーも加わって、21 名の仲間とともに逮捕される。そして銃殺刑の判決を受ける。ただし、執行の直前に皇帝の恩赦で命拾いをしました。それから 12 年後の 1861 年に農奴解放が行われます。しかし、農奴は法的には自由になったものの、土地を手に入れるためには一定のお金を積んで地主から買い取らなければならず、そのほか結構厳しい条件があったものですから、農奴解放は非常に不徹底なものでした。農奴たちは一旦自由になったけれどもどこでどう暮したらよいか分からない。結局は地主のもとで過ごす。一部は都市に出て労働者になる。都市に出て手職がないから、結局は社会の底辺で悲惨な生活を送ることになる。そのような状況で、農奴解放以降ロシアでは資本主義化が急速に進みます。こうして二極化が進行するわけです。

ロシア革命 100 年の重要なポイントの一つは、1861 年の農奴解放から 1881 年のアレクサンドル 2 世暗殺までの 20 年間に、ロシア文学の傑作のほとんどが書かれていることです。トルストイの『戦争と平和』『安娜・カレーニナ』、ドストエフスキーの『罪と罰』『白痴』『悪霊』『カラマーゾフの兄弟』が書かれている。つまり、この 20 年間にものすごく濃厚な時代をロシアの知識人は経験するわけです。

1881 年にアレクサンドル 2 世暗殺事件を起こしたのは、いわゆるナロードニキの「人民の意志」党と呼ばれる過激な人々です。この皇帝暗殺事件以降ロシアでは弾圧の嵐が吹き荒れます。いわゆる進歩的な知識人がすべて大学から追放される。女子の大学における教育が禁止される。ユダヤ人に対する暴力と迫害が繰り返される。本当に沈鬱な時代が訪れます。表面的には革命運動は沈静したかのように見えるのですが、しかし細々とながらも運動は続き、それが 1905 年の第一次ロシア革命あたりから再び噴出していくわけです。

前年の 1904 年に日露戦争が起こります。これによって国内の経済が著しく逼迫し、都市部では食糧不足で労働者の手元にパンが行き届かなくなってくる。大規模なストライキが起こり、請願デモを行った人々に軍隊が発砲して「血の日曜日事件」が起こる。そして、ドゥーマ(国会)が開設されて、いよいよロシアは民主化の道を踏み出したかと思いきや第一次世界大戦が勃発する。戦争によってますます庶民の生活がひどくなって、遂には 1917 年の二月革命に向かっていくわけ

です。

ロシア革命史(1905 年～17 年)

もう少し詳しく経過を見ていくと、1904 年 1 月に日露戦争が開戦する。1905 年 1 月に「血の日曜日事件」が起こる。同年 6 月に戦艦ポチョムキン号の兵士の反乱。ロシアは戦争が続けられなくなり、1905 年 8 月にポーツマス講和会議が開かれる。さらに 10 月に全国でゼネストが始まって、これでだいたい第一次ロシア革命は一段落します。

第一次ロシア革命に先立つ 7 年前、1898 年にロシア社会民主労働党が結成されています。これがいわゆるボリシェヴィキと呼ばれる人たち、レーニンの革命党です。

しかし、1905 年の革命のあと反動期が訪れ革命家たちは国外に亡命して活動を続けるわけですが、1914 年 7 月に第一次世界大戦が起こり、1916 年 12 月に帝政ロシアを陰で握っていたラスプーチンが殺される。そして 1917 年 2 月 23 日に首都ペトログラードで二月革命が始まる。労働者のストライキとデモが自然発生的に発生し、市内全域に凄まじい規模で拡大します。ペトログラード・ソヴィエトという労働者と農民の独立した組織体（ソヴィエトは評議会の意味）が 2 月 27 日に結成され、3 月 2 日に臨時政府が成立する。ツァーリ・ニコライ 2 世が退位します。ロマノフ王朝はここで終焉を迎えることになりました。

そして、4 月 3 日にレーニンが亡命先のスイスからドイツを経由して封印列車で帰って来る。「すべての権力をソヴィエトへ」と有名な「四月テーゼ」を発表します。一方には臨時政府がある。それに対して二月革命を主導したソヴィエト（評議会）が力を持ち、ここでいわゆる二重権力が生まれるわけですね。労働者と農民、兵士が一体となったソヴィエトが臨時政府とどういう関係を保つかということが 1917 年の流れになって行く。自由主義者・資本家たちも反攻を始めます。5 月 5 日に第一次連立政権（第 2 次臨時政府）が成立し、7 月 24 日にはケレンスキーが第二次臨時政府を成立させる。このときコルニーロフ将軍が自己の部隊に首都ペトログラードへの進軍を命令し、反革命を企てるわけです。反コルニーロフの闘いから 10 月革命が始まります。首都のソヴィエトに軍事革命委員会が設立され、ロシア暦 10 月 25 日（西暦 11 月 7 日）に臨時政府が崩壊してソヴィエト政権の樹立が宣言されます。

そして、いよいよ憲法制定会議の選挙が行われるわけです。選挙ではエスエルが多数派を取ります。エスエルというのは社会革命党です。エスエルの支持基盤は農民です。ボリシェヴィキは労働者の党です。農民は基本的に土地が欲しいわけです。ボリシェヴィキは最終的には社会主義革命を目指しているので、工場や土地の国有化を狙うのですが、それに対してエスエルは地主から土地を没収して農民に与えるという幻想を与えた。当時のロシアはまだ農業国ですから、選挙をす

れば、当然農民票が勝ります。11 月に行われた選挙の結果はエスエルが 6 割の議席を支配します。そこで、1918 年 1 月 5 日に開かれた憲法制定会議はエスエル主導で進められるのですが、ここでレーニンは非常に戦略的に行動して、憲法制定会議を途中で閉会とし、第 3 回全ロシア・ソヴィエト大会を 1 月 10 日に開催して革命政府を組織するわけです。

この 1918 年 1 月 5 日というのは、実は十月革命でソヴィエト政権が樹立された 1917 年 11 月 7 日のよりも、はるかに重要な意味を持っています。この段階では、革命的な機運の強いエスエル左派はボリシェヴィキとともに行動をとにしたのですが、第一次大戦のドイツとの講和（ブレスト・リトフスク講和条約）をめぐる両者は対立する。レーニンはエスエル左派の切り崩しをはかり、3 月に彼らが政権から離脱する。ここから内戦が始まっていくわけですね。

ボリシェヴィキ党はそれまでのロシア社会民主労働党の名前を改めてロシア共産党になります。

戦時共産主義と NEP(ネップ)

各地で反革命軍（白軍）の反乱が起こります。アメリカ、イギリス、日本などが干渉戦争を仕掛け、シベリアに出兵します（18 年 8 月）。これに対して革命軍（赤軍）が組織され、ロシアはすさまじい内戦状態に突入します。反革命軍との国内戦、外国の軍事干渉や封鎖に際してソヴィエト政権が取った 1918 年 - 1921 年の経済政策を戦時共産主義（Военный коммунизм）と言います。これは大工業のほか中小企業も統制し、全余剰農産物徴発制、労働義務制、消費物資配給制などをしき、生産と分配をソヴィエト権力の中央統制下に置くものでした。つまり、農民の余剰穀物は全部国家が持ってしまったわけです。農民には食べる分しか残らない。当然のことながら農民の不満は高まります。農民は穀物の見返りに工業製品がほしいのですが、工業生産は内戦で崩壊状態にあり何も生産物資が出てこないわけです。

非常に危機的な状況が起こります。1920 年末にタンボフという町で農民が反乱を起こす。さらに 1921 年 3 月にはクロンシュタット水兵たちの反乱が起こる。兵士たちも農民たちもボリシェヴィキ政権に対してもものすごい反抗的になっているわけです。これをどこまで武力で抑え込めるかというのが実はロシア革命の命運を大きく左右した。クロンシュタットの反乱では最終的に数千人が銃殺されることになるのですが、ここでレーニンは経済政策の大転換を行います。戦時共産主義をやめて市場経済を一部導入する新経済政策 NEP（ネップ）を採用したわけです。

ネップ（Новая экономическая политика）というのはソ連が 1921 年に採用した経済復興政策で、戦時共産主義の結果低下した生産力を回復するため、小規模な私企業や農商業の経営を認めるなど、資本主義的要素を一部復活させたものです。

「それでは革命とは何なのか？」ということになるわけです。「これほどの犠牲を強いて、せつかく共産主義の国を作って、また資本主義にもどるのか」ということで、筋金入りの多くの共産主義者がネップに反対し、革命の理想は潰えたとまで絶望する人たちがいたのですが、このネップの導入には、先進的な芸術家たちも反対しました。彼らは理想主義者なので、食べるものよりもまず理念です。

「悲劇の歴史」

つづいて悲劇の歴史を俯瞰していきましょう。

1917 年の 10 月革命から 1918 年 3 月にエスエル左派が離脱して、ボリシェヴィキ＝ロシア共産党の主導による革命が続く。国内戦が始まって戦時共産主義が敷かれ、1921 年 3 月に新経済政策ネップに転換する。1924 年にレーニンが死亡し、1925 年から 26 年にその後継をめぐるスターリンとトロツキーの確執が起きる。1928 年にトロツキーが追放されて 1929 年にスターリンの権力が確立されます。

スターリンの下で第一次五カ年計画が実施され、経済の重工業化と農業の集団化が強行されます。そして、1932 年から 33 年にかけてウクライナ地方で大飢饉（ホロドモール）が起る。この飢饉で 500 万人以上が餓死したと言われています。その直後にスターリンの最大のライバルとみなされていたキーロフが暗殺される。キーロフ暗殺はスターリンが仕組んだと言われていますが、スターリンはこれを政敵排除に利用して、大テロルを開始します。大テロルは基本的にはスターリンが 1917 年の革命とともに遂行した古参ボリシェヴィキをすべて粛清して自分の権力を確立するための一種儀式のようなものだったわけです。付随して非常に多くの党活動家、軍人、労働者が粛清されていくことになります。

そして 1941 年から 1945 年まで独ソ戦（第二次世界大戦）で 2700 万人が犠牲になり、1953 年にスターリンが死ぬまでスターリン時代は続くことになります。

なぜ、これほどの犠牲を… 革命の「原罪」とレーニンの死

1918 年から 21 年まで 3 年半の内戦で失われた人命が 250 万人。テロルによる犠牲者が 200 万人。飢餓・疫病による死者 600 万人。加えて、亡命者が 200 万人。内戦時の死者は合計で 1000 万人を超えています。第一次世界大戦の戦死者は 150 万人ほどなので、だったら第一次世界大戦を続行していたほうが良かったかもしれない。レーニンの革命政府は第一次世界大戦から離脱することを民衆に約束して革命を成就するわけですが、そのおかげで逆に膨大な犠牲者が生まれたというのはすごく皮肉な歴史です。

内戦時に伴った犠牲の大きさを原点とするなら、その後、人命に対して徹底して尊重の立場をとるべきだった。革命の「原罪」とは、内戦時に反対派に対する徹底弾圧を行った非寛容なレーニンの原罪でもあると思います。したがって、レ

ーニンこそが、その贖罪の営みとしてその後のロシア革命を推し進めるべきであった。しかし、その早すぎる死によってその道は絶たれました。では、なぜレーニンは死んだのか。

1918 年 8 月にレーニンはミヘリソン工場での講演を終えて帰ろうとした際、ファニー・カプランという女性に狙撃され、体内に 3 発の銃弾を受けることになります。うち 2 発は摘出されたのですが、頸動脈近くにあった 1 発は取り出すことができずにそのまま残ることになりました。ファニー・カプランはエスエル左派の活動家です。彼女は極度の近視で、5 メートルくらいの至近距離から撃ったのですが、レーニンに致命傷を与えることが出来なかった。レーニンはこの狙撃事件から立ち直り活動を再開するのですが、1924 年に脳梗塞で亡くなります。1922 年ごろから体調の不安を訴えるようになり、頭痛、吐き気、言語障害が徐々に出てくるわけです。ドイツから医師団が呼ばれて治療にあたりましたが、何回か脳卒中の発作を起こして、1924 年の 1 月にレーニンは死去します。頸動脈から 1 ミリの所にとどまっていた弾丸が血管を圧迫して血流を妨げ、最終的には頸動脈狭窄からくる脳梗塞で亡くなったわけです。ここでむくむくと疑問が沸き起こります。もしもカプランが放った弾丸が 1 ミリ狂わずに頸動脈に当たっていたらどうなったか。この仮説について、『ロシア革命百年の謎』で詳しく書きました。興味のある方は本を手にとってください！

レーニンは遺書を残していて、『スターリンを後継者にしてはいけない』としっかり書き留めていました。ところが遺書はスターリンの目に止まってしまい、公表されませんでした。スターリンとしては、自分が革命家として尊敬し従ってきたレーニンに対して裏切られたという思いがあり、ある意味でレーニンに対する復讐心がスターリンのその後の行動とソヴィエトの歴史に大きな影響をもたらしたと思われます。

スターリン権力の確立

スターリン権力の確立期において非常に大きな意味があるのが、第一次五カ年計画と農業の集団化です。農業の集団化というと、あたかも理想的な農業が営まれたかのような幻想を与えるのですが、そうではありませんでした。農業というのは非常に複雑な仕組み、システムから成っているわけですね。いわゆる富農と呼ばれる豊かな農民は、高度な農業技術、経験に裏打ちされた知恵を持って農業を営んでいた。しかし、そういった優れた農民が集団化によって全部追放されてしまう。最終的には農業の仕方を知らない経験の乏しい人たちが集団化されて農業を行うので、生産性が上がらないのは当然でした。1932 年から 33 年にまたがるウクライナの大飢饉（ホロドモール）はこの農業集団化の結果です。干ばつや日照りといった状況に対しても優れた農民はその対処術を知っていたわけですが、集団農場に集まった農民たちは何も知らず対応出来なかった。これが原因となって、膨大な数の

餓死者を生んだわけでは

当然、スターリンは立場が悪くなるのですが、その起死回生策としてキーロフ暗殺からその犯人探しを通じて 1937 年の大テロが始まります。

三次にわたるモスクワ裁判（公開裁判）で多くの古参ボリシェヴィキが粛清されます。1938 年には最大の難敵で、レーニンが『革命の貴公子』と呼んだニコライ・ブハーリンが粛清されました。ブハーリンは大変な知識人で、彼がロシア革命を率いていればソ連は相当に変わっただろうと言われていますが、スターリンはこのライバルを最後の標的として片づけて、独裁体制をさらに固めていきます。

スターリンの文化革命

1930 年代にはスターリンの権力確立と同時に、いわゆる文化革命が遂行されていく。スターリンの手下となって働いたのはいわゆるプロレタリア系の作家たちです。

1920 年代から 30 年代にかけて、ロシアには素晴らしい詩人、作家、音楽家、建築家、美術家、ものすごい数の芸術家が生まれました。そういう人たちを 1920 年代末ごろからラップ（ロシア・プロレタリア作家協会）と呼ばれる人たちが、批判し排除していくわけです。

ところが、あまりにも彼らが図に乗りすぎたために、スターリンは徐々にラップ派の知識人たち、批評家や作家たちをも粛清的にしてい

社会主義リアリズムの再評価

この時、1935 年の第一回ソ連作家大会で標榜されたソヴィエト社会の芸術はどうあるべきかというドクトリンが「社会主義リアリズム」だったわけ

です。社会主義リアリズムとは、ソヴィエト連邦などの社会主義国家において公式とされた美術・音楽・文学などの表現方法、評論の指針で、社会主義を称賛し、革命国家が勝利に向かって進んでいる現状を平易に描き、人民を思想的に固め革命思想を持たせるべく教育する目的を持った芸術です。「形式においては民族的、内容においては社会主義的」と、何かよく分からないですけれども、要するに労働者や農民がよく理解できるように、ロシア人であってもアルメニア人であってもアゼルバイジャン人であってもよく分かるような多民族性を

持ちつつ、社会主義の理念を表現することを命令したわけ

です。社会主義リアリズムの文学では、N・ショーロホフの「開かれた処女地」「静かなドン」、N・オストロフスキー「鋼鉄はいかに鍛えられたか」、A・ファージェエフ「若き親衛隊」などが挙げられます。

社会主義リアリズムの絵画では、アレクサンドル・デイネカの作品が素晴らしいです。ネットで画像検索すると、彼の描いたいろんな絵が出てきます。リアリズムの絵画なのですが、人間と人間をつなぐ霊性（この場合は「社会主義という霊性」）がドクトリンでも何でもなく感じ取れます。社会主義の理念が人と人との間をつないでいくときに生まれる一種のハーレーションのような精神世界。それがこの時代の絵画にものすごく満ち溢れている。こういうソ連だったら僕も生きていきたいなと言うくらいの理想像が描かれています。これが社会主義リアリズム絵画の本領で、これまで長い間多くの人が批判してきたのですが、最近新たに社会主義リアリズムが見直されようとしています。人間にとって真の芸術とは一体何なのかと考えた場合に、芸術がもたらすべき幸福の理想を社会主義リアリズム芸術は結構しっかりしたパワーで表現していたと思えるところがあるのですね。

雪解けからペレストロイカへ

雪解けは、74 年にわたるソヴィエトの歴史のなかの、短いながらももっとも幸せな時代でした。1956 年に、時のフルシチョフ第一書記が行ったスターリン批判によって雪解けの時代の幕は切って落とされました。人々にはわかに、独ソ戦とスターリン時代の忌まわしい記憶から徐々に立ち直りはじめます。とにもかくにも、無数といってよいほどのすばらしい芸術文化が誕生しました。むろん、それ以前も歴史の影に隠れるようにして、優れた文化芸術の伝統は生きていました。文学では、パステルナーク、アフマトワ、グロスマン、プラトノフ、音楽では、ショスタコーヴィチ、プロコフィエフ、映画では、エイゼンシュテイン、演劇では、メイエルホリド、美術では、マレーヴィチ、タートリン、フィローノフたちです。このリストからは、亡命した芸術家たちの名前は外されています。

スターリンの死から 5 年を経た段階で、もう新たな時代が到来していました。雪解けの芸術家たちは、みな圧倒的に世代が若いのです。スターリン時代は幼少期の記憶に留まるにすぎません。名前を挙げるのももどかしいほどです。文学では、ソルジェニツィン、エフトゥシェンコ、音楽では、シュニトケ、グヴァイドゥーリナ、映画では、タルコフスキー、美術では、ズヴェーレフ、カバコフ。いや、これ以上挙げるのはやめましょう。ただ、1968 年のワルシャワ条約機構軍によるチェコスロヴァキア侵入で雪解け時代は終わりますが、その後「凍てつき」の時代と呼ばれたブレジネフ時代にも、

文化の勢いはとどまることがありませんでしたし、逆に一般の市民は、最高の幸福を手にすることができました。今も老いた世代のなかには、この時代を黄金時代として懐かしがる人も少なくありません。私の若いときに出合った友人たちも、みなこの幸福な時代を生きた人たちです。

凍てつきを経て、いよいよペレストロイカの時代が訪れる。ペレストロイカ時代とは、文芸復興の時代でもあります。スターリン時代から凍てつきの時代にかけて、それでも検閲によって抑圧された無数の芸術文化がにわかに光を浴びるようになりました。たんに文化芸術だけでなく、歴史上の悲惨な事実も明るみに出されました。その一つが、1930 年代末に起こった「カティンの森」の事件です。ゴルバチョフ政権時代のソ連については、これ以上、述べることはしません。ソ連崩壊は是非か。この問題は、ロシア革命は、是非かと同じくらいの重みをもっています。ゴルバチョフの評価は永遠に分かれることになるでしょう。

最後に～ロシア人のアイデンティティ

このグローバル化時代の中で、完全に一元化あるいは一極化してしまった世界に対する対抗軸としては、まず中国があり、EU がある。イスラムもまた若干の対抗軸になっている。第 4 の対抗軸として当然プーチンのロシアがリーダーシップをとっている。今は経済制裁でロシアの成長率は落ちていますが、経済制裁にもいいところがあって、それは自国の産業を育てる効果をもっています。自分たちで工業生産するしかない。ロシア人にとっては精神的に自信を持って生きることがとても大事なですね。

1998 年にデフォルト＝債務不履行を経験して、そのころはどこに行ってもロシア人は疫病神扱いにされた。ロシア人にとっては最悪の自信喪失の時代があって、その記憶があるからこそ自分のナショナルティに自信を持てるということは本当に大事なのです。

自分たちは強いんだ、それなりに立派なんだという意識を持つためには、「信じる」しかないですね。何かを信じるしかない。プーチンは一種の神になったと私は思います。有害ではありますが、何かそこに強いものがあって、そこに自分を託すことができる。神になった。そういう意味において評価を超えている。つまりこれがロシア人のアイデンティティなのです。今ロシアで起こっているスターリン主義への回帰といった現象も同じです。スターリンがあれほどのことをやって、なおかつ評価されるというのは、ロシアが精神的にまだまだ自立できていない証です。スターリンは悪の体現者である以上に、力の体現者としてイメージされているわけですね。力が強くて逞しいものの象徴の一つがスターリンなのです。その中に入って行けば安心だというこれもまた、一種霊的な感覚に対する信仰がロシア人にはあるのです。

ロシアはどこへ行くのか。経済的には圧倒的に力をもつ、

アメリカ、中国に比べ、ロシアはいかにも見劣りしますが、精神的な優位性への自信は今もって大きいのではないのでしょうか。ただ、アメリカ大統領選への介入や、ドーピング問題など、ロシアは、国家としてまだ自立していないばかりか、非常に深いコンプレックスを抱えていることがわかります。早く立ち直ってほしいと心から願っています。我々には音楽がある、文学がある、芸術がある。こう思えることはたしかに大事なのですが、そうした精神性も、いずれこのグローバル時代が破壊していく可能性があるわけです。そうしたグローバル時代の悲劇的側面にどれだけ対抗できるのか。ロシアががんばるか、がんばらないかは、人類の運命とも密接にリンクした問題です。

(2017 年 11 月 18 日、JIC ロシアセミナーにて)

ドストエフスキー協会

入会のご案内

本会は、ロシアの作家フョードル・ドストエフスキーの文学とその世界観に関する研究とその普及を目的とし、広くロシア文学・文化を愛する人々の輪を作ることをめざしています。

会長; 亀山 郁夫 (名古屋外国語大学学長)

副会長; 望月 哲男 (国際ドストエフスキー協会副会長)

URL; <http://www.dsja.jp/index.html>

申込みはメールで(会費は無料)⇒ dsja_gg@nufs.ac.jp

日本語教師募集！

キルギスの 11 年生学校「ピリムカナ・カント校」

キルギスで日本語教師をやってみませんか。ビシケク郊外にある 11 年制学校で、日本語教師を募集しています。やる気のある人であれば、年齢、性別、学歴を問いません。給料は少なく、往復航空券も自己負担とほぼボランティアの条件ですが、教師経験を積み、ロシア語もしくはキルギス語を学習するよい機会になります。

<条件>

受入校; ピリムカナ・カント校(私立の 11 年制学校)

所在地; ビシケク郊外(バスで約 30 分)のカント市

授業数; 1 授業 40 分 × 1 日 3～5 授業 × 週 5 日 * 増減可
給 料; 月額 150 ドル～200 ドル

宿 舎; ホームステイまたは学校の寮(1 人部屋/無料)

* アパートを希望する場合は自己負担。

特 典; 希望によりロシア語またはキルギス語の授業が無料で提供されます(40 分授業 × 週 3～4 回)。

募集人数; 1～2 名

期間; 18 年 9 月～19 年 6 月(希望により延長あり)

問合せ先; JIC 東京事務所 TEL: 03-3355-7294

e-mail; jictokyo@jic-web.co.jp

鉄道は続く 《Part 2》

モスクワ-ベルリン国際寝台急行 「ストリージ(スイフト)」号の旅

神保 康興 (JIC 東京)



ロシアの鉄道で真っ先に思い浮かべるのはシベリア鉄道だろう。看板列車「ロシア号」は、ウラジオストク-モスクワ間 9300 キロを 6 泊 7 日かけて走破する。しかし、何かと忙しい日本人にとって、これだけ時間を取って旅をするのはかなり難しい。

一方、ロシアはヨーロッパと地続き。多くの国々と鉄道で結ばれている。日本は島国なので、陸路で国境を超えるのはなかなか得難い貴重な体験となる。ロシアから欧州への鉄道旅は、車窓の変化やまた国境検査もある意味楽しめる上、乗車時間は 1 泊 2 日または 2 泊 3 日で全線乗車できる。このロシア・欧州間を結ぶ鉄道の魅力を日本の旅好きの皆さんにもっと知ってもらいたい。ということで、モスクワ-ベルリン鉄道の旅、最新情報をお届けします(筆者は、2013 年にモスクワ-ベルリン-パリの第 23 列車に乗車した。今回はその 2 回目の体験記である)。

ロシア鉄道がモスクワ-ベルリン間に新列車を運行

ロシア鉄道は、モスクワ-ベルリン間で新たな列車「ストリージ(スイフト=アマツバメ)」号(第 13/14 列車)の運行を 2016 年 12 月 11 日から開始した。この列車に投入されているのはスペイン製のフリーゲージトレイン「タルゴ 9」タイプ客車で、軌道の幅が異なる(ロシア・ベラルーシ=広軌 1520mm/欧州=標準軌 1435mm)区間を台車交換の必要なく切り替えて走行できる。これまでベラルーシ・ブレストの専用施設で 1 時間以上かけて行っていた台車交換の必要がなくなり、高速走行に適した連接構造(車両と車両の間に台車がある)も相まって、モスクワ-ベルリン間で約 5 時間(正確には西=ベルリン行きで 4 時間半、東=モスクワ行きで約 5 時間半)の時間短縮が実現したという。日本でも一部報道はされたものの、まだほとんど知られていないこの列車を体験し、未来の旅人達にその魅力を知ってもらいたいと思い、去る 11 月 24 日ロシア航空でモスクワに飛んだ。

モスクワでは、ベルリン行国際列車が出るベラルスキー駅のすぐ近くにあるホテル「グランド・ベラルスカヤ」に投宿した。空港からアエロエクスプレスでベラルスキー駅まで 35 分。ホテルの部屋は日本のビジネスホテルよりも心持ち広い程度の大きさで駅の広場を一望できる眺めの良い部屋だった。バスタブなしのシャワーのみだが、個別空調や液晶テレビ、ポットや冷蔵庫、ドライヤーといった必要な備品はそろっており、wifi ももちろん無料。贅沢に過ごそうと思わなければ十分快適だ。

「ストリージ」号の出発時刻は午前 11 時 19 分。10 時前にホテルをチェックアウトし、早めに駅に向かう。ベラルスキー駅正面の屋根にキューボラの付いた入口は昨日降り立ったアエロエクスプレス専用口で、その左手が長距離列車の入口になっている。反対の右手は近郊電車(エレクトリチカ)の入口だ。



入口から奥に入ると、すぐにセキュリティゲートがあり、手荷物を X 線検査機に通さなければならない。すべての長距離列車利用客に対して手荷物検査を実施して

始発はモスクワのベラルスキー駅

いるのは国情なので仕方ない。ゲートを抜けると、1 階に切符売場と飲食品・土産物などの売店、ATM、ホームへの出口があり、エスカレーターで上がった 2 階が待合室になっている。2 階にも複数の売店、軽食・コーヒースタンド、さらにキッズコーナーがある。待合室には電光掲示板があり、出発列車の案内が絶え間なくアナウンスされている。2 階からホームを見ると、すでに「ストリージ」号は 3 番ホームに入線している。さっそく 1 階に降りてホームに出ることにする。発車時間に関係なくホームに出ることはできるのだが、寒空のためか他の旅客は誰もホームに出ていない。

新列車「ストリージ」号

停車中の「ストリージ」号をじっくり観察してみる。スペイン製の軌道可変連接車両「タルゴ 9」タイプ客車の先頭に立つのは、フランス・アルストムの技術協力で開発されたロシア鉄道の EP-20 型電気機関車。長大な 20 両編成を単機で牽引する力持ちだ。「タルゴ 9」タイプ客車は連接台車方式で、車輪は客車と客車の間に 1 軸ずつしかなく、台車の中央には「Talgo」の赤いロゴが刻まれている。また低床のため、他のロシア鉄道車両よりも屋根が低くコンパクトに見える。

車両編成を前から見ていくと、機関車から順に、電源車(210 号車)、2 等寝台車 5 両(211 号車～215 号車)、1 等座席車 2 両(216～217 号車)、ブッフェ/キッチンカー(218 号車)、食堂車(219 号車)、1 等寝台車 4 両(220～223 号車)、つづいてリュク

ス&2等バリアフリー寝台車とリュクス寝台車が交互に5両(224～228号車)つながり、最後に電源車(229号車)の計20両となっている。

キャリーケースとカメラを片手に、ホームを行ったり来たりしているうちに、出発30分前の10時50分に乗車開始のアナウンスが流れた。指定されたリュクス寝台車・225号車に向かう。

まずはドア前に陣取った車掌によるパスポートとチケットのチェック。特にベラルーシのビザを持っているかどうか入念に確かめられた。後ろに続く乗客がいなかったのも、これからしばらくお世話になる車掌と親しくなろうと思い自己紹介をする。「自分は日本の旅行会社の社員で、この列車を日本のお客さんに紹介したくてこの列車に乗ることにした」と話しかけると、若い車掌は喜んで気さくに応じてくれた。そして、「日本の新幹線はすごいそうじゃないか、最高時速は何キロくらいなのか」などと質問された。建設中のリニア中央新幹線のことを話すと、非常に驚いた様子だった。見回すと、車両ごとに立つ車掌は全員ロシア鉄道の制服を着用しており、2013年に乗車したパリ行き第23列車と違い、ロシア鉄道の車掌しか乗務していない様子だ。



清潔・快適！2名用客室

コンパートメントに荷物を運びこむと、早速これから約20時間を過ごすわが「城」を検分することにする。今回の利用はリュクス寝台車の11番ベッドで、車端の2名用客室を1人で占有する形になる。コンパートメントの通路側ドアには、停車駅の名前と景観をあしらったカラフルなイラストが描かれている。室内には2人掛けの座席が並んでいて、ヘッドカバーにはロゴマークとSWIFTの英文字がプリントしてある。壁面にはオンデマンドで数本の映画(ただしロシア語のみ)が楽しめるモニターと、暗証番号方式のセーフティボックス、それに専用シャワー&トイレのドアがある。

ドアを開けると、左手に便座、右手に洗面台、奥がシャワーになっていて、透明ビニールのシャワーカーテンがかかっている。洗面台の上にはガラスコップが2つとデンタルキットが入ったポーチ、赤青2色のスリッパが2セットある。トイレは新幹線などと同じ圧縮空気で吸い込む方式。ドア横には小さなゴミ箱。トイレ内にもゴミ箱が設置されている。

シャワー&トイレドアの横には折り畳み式の階段(梯子ではない)があり、2段ベッドに上がれる構造になっている。机は小さめで、その上にはイヤホン2組、案内パンフレット、バーのメニュー、非常出口案内、瓶入りミネラルウォーター1本。全ての照明はLEDだ。220ボルトの電源プラグはトイレ内に1箇所、コンパートメント内に2箇所(窓側と通路側)。



ベッドごとに1か所割り当てられている。ドアのカギはカードキーで安心だが、オートロック式なのでとじ

込みには要注意だ。コンパートメント内に車掌を呼び出すブザーがある。ベッドは希望するときに、車掌を呼び出してセッティングしてもらうようだ。

車両の端に1か所、電気式の給湯器があり、使い捨て耐熱プラスチックコップが設置されている。ただしお湯はぬるめで、カップ麺を作るには少し物足りない。給湯器上部には日時・速度・室内温度・停車駅を表示する電光掲示板が設置されている。

駅のアナウンスなく静かに発車

定刻より1分早く、11時18分にドアが閉まる音がする。ホームでも車内でもアナウンスはなく、定刻の11時19分に列車は静かにベラルスキー駅を出発した。

発車後すぐに車掌が回ってくる。まず再び、ベラルーシとシェンゲン(欧州)ビザの所持が確認される(日本人はシェンゲンビザ不要と説明し納得)。そして、コンパートメント内の備品について一つ一つ丁寧な説明があり、乗車券が回収される。

車内にはwi-fiがあり、利用は無料。パソコンやスマートフォンでブラウザを立ち上げると、列車の現在位置と速度、車内設備や食堂車のメニューなどを表示する初期画面が表示される。このページを見ている限り登録は必要ないが、ネットサーフィンをしようとする、登録画面からロシアの携帯番号のSMS経由で認証を取らなければならない、ロシアの携帯電話を持っていないと事実上使うことができない。

発車後はしばらくモスクワ市内を時速50キロくらいでゆっくり走行する。市街と郊外を隔てる環状道路と沿道の巨大ショッピングモールが見えると、もうモスクワ市とはお別れだ。発車後40分ほどで車窓から郊外の高層アパート群がなくなり、代わりに一軒家がちらほら見えるようになる。同時に列車は徐々にスピードを上げていく。発車後1時間もすると住宅もまばらになり、列車は時速120キロ以上で疾走する。

ほどなく、先ほどの車掌がもう1人を伴って、土産物を乗せたワゴンを押してやってくる。物見遊山の外国人と思われたようだ。

彼らにインセンティブがあるのか、ロシア鉄道のグッズを熱心に売り込んでくる。勢いに押され1本150ルーブルのストリージのロゴ入りボールペンを7本、300ルーブルのロシア鉄道オリジナルマグカップ1個を買う(カード払い可)。

車内見学～バリアフリー用コンパートメントもある！

最初の停車駅であるスモレンスクまでまだ2時間ほどあるので、食堂車へ向かうついでに車内見学をしてみる。

リュクス 224 号車・226 号車・228 号車の 3 両にはバリアフリー用コンパートメントがある。室内設備はリュクスと同じだが、障害者割引運賃の関係か、等級では2等車扱いになっている。シャワー＆トイレもバリアフリー仕様になっており、車内用の車椅子が各シャワールーム内に備え付けられている。

1等車にはシャワー室がなく、トイレも共同。昼間は並列座席で夜は2段ベッドになる2人用コンパートメント。座席とベッドの仕様はリュクスと変わらない。室内には洗面台内蔵のデスクが設置されている。1等車にはコネクティングルームになったコンパートメントもある。

2等車は並列座席が向かい合わせになった4人用コンパートメント。座席は、リュクスおよび1等車に比べて背もたれが薄く、ひじ掛けも小さい。

2両連結されている1等座席車までたどり着いたところで、チーフパーサーを名乗る車掌に丁寧な口調で「どうして写真を撮っているのか」と訊かれた。乗車時同様に、旅行会社の社員として客に紹介するため体験乗車していると話すと、「空いているコンパートメントなら撮影していいよ」と快く応じてくれた。



2等寝台車は3分の2くらい埋まっていたが、座席車は2両とも人が座っていなかった。新幹線のグリーン車並みの大ぶりのシートが通路をはさみ2席と1席ずつ

並んでいる。向きはすべてモスクワ方向に固定されて回転しない。従って、ベルリン行きの場合すべて進行方向に背を向けることになってしまう。シートはシェル型で、倒しても後方のシートにせり出さない設計になっている。中央側のひじ掛けにオーディオサービスのジャックがあり、テーブルは反対側のひじ掛けに内蔵されている。天井から下がっている液晶モニターでは映画(ロシア語)が上映されている。

食堂車でボルシチを食べる

13時30分頃食堂車に到着。先客は隣の車両で見かけた小さな女の子2人と若いお母さんの家族連れだけ。お子様メニューらしきものを囲んではしゃいでいる。

食堂車は、4人掛けテーブル5脚、2人掛けテーブル5脚の計30席。窓の上には、各コンパートメント入ロドアと同じく停車駅とその景観がイラストで描かれている。

隣の車両はブッフェ(カフェテリア)車だが、メニューは同一。キッチンとレジはブッフェ車に設置されている。



ボルシチ 380ルーブル、チキンカツレツ「パジャルスカヤ」750ルーブル、ミニバケット 50ルーブル。ガス入りミネラルウォーター 300ルーブル、レモンティー 150ルーブル。しめて 1630ルーブル(約 3200円)。総じて高めだが、

とりわけ飲み物は非常識な値段。しかし、このガラガラな食堂車の運行コストを考えると仕方ないと諦める。1時間ほど車窓を眺めながら食事を楽しんだ。定期列車の食堂車が全て廃止されてしまった日本ではもう味わうことのできない貴重な時間だ。席を立とうとしたとき、入れ替わりにようやく1組の夫婦が現れた。

スモレンスクを過ぎるとベラルーシ国境

15時35分、最初のかつロシア国内で唯一の停車駅・スモレンスクに到着。2分停車の後、定刻通り音もなく発車する。民家はほとんど見られない。白樺林が散在する平原を時速100キロ以上で疾走していく。もうしばらくするとベラルーシ国境だ。国境を確かめようとしばらく車窓を凝視する。スマートフォンのグーグルマップと代わる代わる見比べると、16時20分頃に国境を通過したはずだが、境界線を表すものは何も見当たらなかった。ロシア・ベラルーシ間はEU圏と同じような相互往来の協定があるため、両国民は国境を意識せずに往来しているが、私たち外国人はベラルーシ・ビザの取得が必要だ。ベラルーシ入国時には何の検査もないが、出国時にはビザ検査があるので、乗車時にあれだけしつこくチェックされたのだ。

ベラルーシ最初の駅・オルシャには定刻16時48分に到着。中国語が書かれた長い貨車が何両も連なって停まっている。はるばる中国から広大なユーラシア大陸を駆け抜け、ここまでやって来たのかと思うと、この貨車が見てきた沿線の風景に思いを寄せずにはいられない。

15分間停車するというのでホームに降りてみると、何処からともなく初老の婦人が何人も近寄ってきて、「タバコはいらないか」、「ドラニキ(じゃがいもパンケーキ)はいらないか」と、物売りを試みる。外気温は1度ほど。小雨がぱらついている。モスクワよりは少し暖かい。ホームの片隅に、かつてソ連全土で活躍したP-36型蒸気機関車の巨体が保存されている。

定刻の17時03分オルシャ発。夕闇が近づき外は見えにくく

なっているが、ベラルーシに入って集合住宅よりも一軒家が多くなっているのに気づく。18 時頃には民家や街頭の明かりが目立ちはじめ、列車が首都に近づいているのを感じる。

ベラルーシ・ミンスクに到着

ベラルーシの首都・ミンスクには 19 時 08 分、定刻より 1 分早く着いた。停車駅のたびに外をうろろするのを車掌は見ていたよ



うで、「今度の出口はこちら側だよ」と指し示してくれる。停車時間は 15 分間だと言うので、駅舎の方へと散歩してみる。4 年前に訪れた時に比べて駅舎の改築が進み、地下鉄駅への直結通路やショッピングモールなどが整備されている。迷って乗り遅れるのも怖いので、町に出るのはあきらめてホームへ戻る。

車両の前では、同じ号車の 2 つ隣の客室にいる初老の婦人が、連れてきた飼い犬をホームで散歩させている。のどかな光景に見えるが、検疫はどうするのだろうか。

19 時 23 分ミンスク発。郊外に抜け出ると、列車は再び速度を上げた。夕食にありつくため、再び食堂車に向かう。

夕食のメニューは野菜サラダ 410 ルーブル、ヌードル入りチキンスープ 300 ルーブル、黒パン「ボロジンスキー」30 ルーブルを 2 個。合計 770 ルーブル。

クルーはウェ이터とキッチンで働くコックの 2 名だけのようだ。支払いにブッフエ車へ行くと、休憩なのかサボりなのか、車掌達は何人も集まっておしゃべりに興じていた。お客らしき人は見あたらない。のどかと言えばのどかな光景だ。



コンパートメントにもどり、そろそろベッドを用意してもらおうと、ブザーを押して車掌を呼び出す。合い鍵で解錠して、車掌が 2

つの分割座席を背もたれの奥の壁ごと手前側に倒すと下段ベッドが現れた。壁の内側にシート・掛け布団カバー・枕がセットされており、ベルトで固定されている。さらにその上の壁を手前側に倒すと上段ベッドになる構造だ。

ポーランドとの国境・ブレスト着

ベラルーシ最後の駅・ブレストには 22 時 40 分着(停車時間 8 分)。ベラルーシの国境検査官と税関検査官が乗り込んでくる。特に言葉を交わすことなく、パスポートとロシア入国時に受け取ったミグレーション(入出国)カードを渡す。続けてやってきた税関検査官は荷物の個数を確認したただけで去っていった。列車が少し動いてから停車すると、先ほどの国境検査官が再びやってきて、出国スタンプが押されたパスポートが返却される。

廊下の向こうから、「サバーカ(犬)が云々」という、税関検査官の声が聞こえてくる。さっきの飼い犬のことだろう。無事に出国できるのだろうか。

列車は徐行、停止、再び徐行を繰り返す。恐らくこの間に線路上で自動的に車輪幅が広軌(1520mm)から標準軌(1435mm)に切り替わっているはずだが、特に騒音や振動は感じられなかった。4 年前の第 23 列車のときは、台車交換所に移動して、一両一両切り離してジャッキで車体を持ち上げ、台車を交換していたのだから、「タルゴ 9」客車の投入による時短効果は目覚ましいものがある。

この間に時計をヨーロッパ標準時に合わせる。マイナス 2 時間。周囲は漆黒の闇だが、時折サーチライトが煌々と照らされているところがあり、明確な境界線はわからないものの、国境の緊張感は伝わってくる。

ポーランドに入って再び国境審査

ブレストを発車して約 30 分、ポーランド側の最初の駅・テレスポール着(21 時 28 分着)。ここで 45 分間停車して、今度はポーランドの入国審査と税関検査を受ける。



21 時 55 分ごろになってようやく入国審査官がやってきた。パスポートの確認だけで特に質問はなく、その場で入国スタンプが押される。続いて税関検査官が来て、再びパスポートをチェック。ここではなぜかタバコの有無を聞かれただけだった。

テレスポールを定刻通り 22 時 13 分に出発する。ロシア時間だと 24 時過ぎだ。前日出発した日本時間ならばすでに朝 6 時。眠気がピークに達していたので、コンパートメント内の専用シャワーに入ることにした。シャワーの湯量自体は普通だが、節水のためかボタンを押してから数秒でお湯が止まってしまうので、たびたびボタンを押さな

いとお湯を浴び続けることができない。身体が温まるまでかなりの時間がかかった。

ワルシャワ中央駅着

23 時 51 分ワルシャワ中央駅着。0 時 03 分同駅発(停車時間 12 分)。ついに眠気が勝ちベッドにもぐりこむ。

ワルシャワを過ぎたところから車両が極端に揺れるようになり、騒音もひどくなる。この区間は路盤工事をしていると聞いていたが、その影響だろうか…と思いつつ眠りに落ちた。

途中のポズナンには 4 時 20 分着(10 分停車)、4 時 30 分発のはずだが、深い眠りの中で気がつくことはなかった。

5 時半過ぎにはと目覚める。列車はポーランド国内を疾走している。5 時 56 分、定刻の 10 分遅れでポーランド最後の駅・ジェピン到着。本来 5 分停車で 5 時 51 分発のはずだが、わずか 1 分足らずの停車で出発する。途中、貨物列車がたくさん停まった保税地区のような場所で一時停車の後、定刻より 5 分遅れの 6 時 17 分に、ドイツ側最初の駅・フランクフルト・アム・オーデルに到着。3 分停車で 6 時 20 分発。定刻より 5 分遅れのままだ。周囲はまだ闇の中。少し走ると、待避線や車庫に S バーン(通勤電車)の車体がちらほら見られるようになり、列車がベルリン首都圏に近づいてきていることがわかる。しかしこの日(11/26)は日曜日なので、ホームで待つ通勤客はまばらだ。

翌朝 7 時 17 分 ベルリン東駅に到着

終着駅が近づいてきたので、名残りを惜しむ思いで、反対端にある給湯器まで歩きながら、車両の中を見て回った。ふと、ドアが開け放たれた 2 つ隣のコンパートメントに、あの飼い犬がこっちを向いてちょこんと座っているのが目に入った。無事にドイツまで辿り着いたようでひと安心。飼い主と会話を交わしたわけではないが、同乗者に運命共同体のような気持ちを抱くのは長距離列車の旅ならではかも知れない。

7 時を過ぎた頃からようやく薄明かりが差し始める。間もなくベルリン到着との放送が流れ、定刻より 2 分早い 07 時 17 分に終着駅・ベルリン東駅に到着した。



お世話になった車掌と別れを惜しんだ後、ホームに降り立つて列車の先端まで行ってみると、やはり機関車は付け替えられ

ていた。ポーランド・ドイツ区間を牽引してきたのは、携帯電話会社の派手なピンクの全面広告で彩られたポーランド国鉄の EU-44 型電気機関車(シーメンス製)だった。

ベルリン東駅は対面式ホーム 1 本と島式ホーム 4 本の駅。4 年前に第 23 列車で到着した超近代的なベルリン中央駅に比べ場末感が漂っている。もともとこのベルリン東駅は、旧東ベルリンの中心駅だったのだが、東西ドイツが統一してすでに 25 年が経過し、駅舎自体は社会主義時代の名残を感じさせない近代的なガラス張りの建物に生まれ変わってはいる。しかし、ベルリン発着の他の長距離・国際列車のほとんどがベルリン中央駅発になっているため、あたかも東京の上野駅のように、他の列車に乗



り継ぐには S バーン(近郊電車)で中央駅に出なければならない。「ストリージ」号がどうして中央駅発着でなく、この不便なベルリン東駅発着なのか。「ストリージ」号は、ロシアとドイツの首都を結ぶ定期列車であるにもかかわらず、今のヨーロッパとロシアの関係を反映して冷遇されているのではないかと、ついうがった見方をしてしまう。

それでも、揺れ動く国際情勢にも関わらず、ロシアと欧州をダイレクトに結ぶ国際列車が定期的に運行され、私たちもその魅力ある旅を経験することができるのは特筆すべきことだと思う。この拙い旅行記が、他の多くの方々の旅情を誘うことを願ってやまない。

【モスクワ・ベルリン間 チケット料金】※2017 年 11 月現在

リュクス(デラックス)寝台; 2 名相部屋=24680.9 ルーブル

1 名占有=45172.5 ルーブル

1 等寝台; 上段=15117.7 ルーブル

下段=15913.1 ルーブル

下段占有=18598.3 ルーブル

2 等寝台; 上段 & 下段=11740.0 ルーブル

バリアフリー= 12357.9 ルーブル

座席車; 10824.6 ルーブル

※前回(2013 年 11 月)の「モスクワ・ベルリン・パリ号」乗車体験旅行記については、本紙第 179 号(2014 年 4 月)・第 180 号(2014 年 7 月)に掲載しています。ご参照ください。

「日本におけるロシア年」イベント情報



「日本におけるロシア年」「ロシアにおける日本年」の今年、日本各地で、またロシア国内でも、様々な日ロ文化イベントが開催されます。

以下は、現時点で編集部が把握しているイベント情報です。他にもまだたくさんのイベントが準備されています。たまにはロシアな気分を味わうために、機会を見つけて皆さんご参加ください（編集部）

百万本のバラ ディナーライブ

（加藤登紀子 ライブ）

日時:5月18日(金) 18:00 開場 18:30 開会

会場:名古屋国際ホテル《国際ホール》

会費 ; A 席 20,000 円 B 席 18,000 円

主催:一般社団法人 日ロ友好愛知の会

申込連絡先;TEL/FAX ; 052-485-6853(日ロ友好愛知の会)

E-mail;nichiroaichinokai@yahoo.co.jp

驚異の新時代ロシアン・トラッドバンド

オタヴァ・ヨ (OтаваË) コンサート

日時:6月30日(土) 14:30 開場 15:00 開演

会場:伊丹アイフォニックホール(伊丹市立音楽ホール)

会費;前売 3,500 円 当日 4,000 円(学生;前売2500円/当日3000円)

*全席指定

主催:伊丹アイフォニックホール(伊丹市立音楽ホール)

申込連絡先;TEL;072-780-2110(伊丹市立音楽ホール)

TEL; 0570-02-9999(チケットぴあ)

7月1日(日) 安来市・総合文化ホール小ホール

7月3日(火) 武蔵野市・市民文化会館小ホール

詳細:<https://www.harmony-fields.com/a-otavayo/index.html>

ロシア文化フェスティバル in Japan

＜オープニング・セレモニー＞

ミハイル・プレトニョフ指揮

ロシア・ナショナル管弦楽団コンサート

歌劇「イオランタ」他／アナスタシア・モスクヴィナ、木嶋真優、ヴァイタリ・ユシユマノフほか

6月12日 東京・サントリーホール

プーシキン美術館展―旅するフランス風景画

4月14日(土)～7月8日(日) 東京都美術館

7月21日(土)～10月14日(日) 大阪・国立国際美術館

詳細:<http://pushkin2018.jp>

＜ロシアサーカス誕生 145 周年＞

来日 60 周年・ポリショイサーカス

7月14日～16日 長野・長野市ビッグハット

7月21日～24日 埼玉・所沢市民体育館

7月27日～8月5日 神奈川・横浜文化体育館

8月9日～13日 千葉・幕張メッセ・イベントホール

8月16日～20日 愛知・名古屋ドルフィンズアリーナ

8月24日～26日 三重・津市産業スポーツセンター

モスクワ・スケートサーカス

8月1日 横須賀芸術劇場

8日 東京・葛飾 かつしかシンフォニーヒルズ

10日 千葉・市川市文化会館

12日 千葉・南総文化ホール

13日 長野・まつもと市民芸術館

15日 東京・調布市グリーンホール

19日 千葉・成田国際文化会館

25日 長野・長野市芸術館 他

サンクトペテルブルグ舞台サーカス

7月～8月 東京ほか

キャラクター生誕 50 周年記念 チェブラーシカ展

5月12日(土)～6月24日(日) 北海道・釧路市美術館

ロシア・ソビエト映画祭

7月10日(火)～8月5日(日)

東京国立近代美術館フィルムセンター大ホール

「アンナ・カレーニナ ヴロンスキーの物語」、「マチルダ」ら 24 本 2 回上映

華麗なるクラシックバレエ・ハイライト

8月17日(金)13:00 千葉・千葉市民会館

27日(月)18:30 豊川・豊川市文化会館

29日(水)18:30 静岡・静岡市民文化会館

30日(木)18:30 前橋・昌賢学園まえばしホール

東京バラライカアンサンブル公演

アレクサンドル・ツィガンコフ、ヴァレリー・ザジーギン、インナ・シエフチェンコ、ラリサ・ゴドリヴ+伊藤ちる

スヴェトラノフ記念ロシア国立交響楽団来日コンサート

指揮／西本智実&マリウス・ストラヴィンスキー、

独奏／リリヤ・ジルベルシュタイン

- 9 月 9 日(日) 新潟・長岡市立劇場
11 日(火) 横浜・桐蔭学園
12 日(水) 山梨・コラニー文化ホール
13 日(木) 東京・サントリーホール
15 日(土) 横浜・みなとみらいホール
16 日(日) 福島・福島市音楽堂
17 日(月・祝) 東京・東京オペラシティ
18 日(火) 東京・武蔵野市民文化会館
19 日(水) 札幌・札幌コンサートホール
21 日(金) 滋賀・彦根市文化プラザ
22 日(土) 大阪・ザ・シンフォニーホール
23 日(日・祝) 福岡・アクロス福岡
24 日(月・休) 岩国・シンフォニア岩国
25 日(火) 松山・ひめぎんホール

ロシア・バレエ・ガラ 2018

- 9 月 1 日(土) 15:00 東京・文京シビックホール大ホール
2 日(日) 15:00 同上

セルゲイ・レーディキン ピアノリサイタル

- 9 月 14 日(金) 14:00 横浜みなとみらいホール
15 日(土) 14:00 東京・浜離宮朝日ホール
16 日(日) 14:00 静岡音楽館 AOI
17 日(祝) 14:00 川口総合文化センターリリア音楽ホール
20 日(木) 19:00 京都アンサンブルホールムラタ
24 日(月・休) 14:00 大阪狭山市文化会館小ホール

レオニード・ヤコブソン記念 ロシア国立サンクトペテルブルグ・アカデミーバレエ公演「くるみ割り人形」

- 12 月 15 日(土) 神奈川県民ホール
16 日(日) 昭和女子大学人見記念講堂
17 日(月) 聖徳学園
19 日(水) ルネこだいら
20 日(木) ソニックシティ
22 日(土) 東海市芸術劇場
23 日(日) グランキューブ大阪
24 日(月) 三重県総合文化センター
25 日(火) 日本特殊陶業市民会館
28 日(金) オーチャードホール
29 日(土) オーチャードホール
30 日(日) ロームシアター京都

モスソビエト劇場・チェーホフ三部作日本初公演

ロシア文化界の大重鎮、巨匠アンドレイ・コンチャロフスキーが
チェーホフ三部作を演出。

- 12 月 6 日(木) 東京・かめありリリオホール 『ワーニャ伯父』
8 日(土) 東京・かめありリリオホール 『三人姉妹』
9 日(日) 東京・かめありリリオホール 『櫻の園』
11 日(火) 鎌倉・鎌倉芸術館 『櫻の園』
13 日(木) 立川・たましん RISURU ホール 『櫻の園』
15 日(土) 東京・練馬文化センター 『三人姉妹』
16 日(日) 東京・練馬文化センター 『櫻の園』

クリスマス・アヴェ・マリアコンサート

サンクトペテルブルグ室内合奏団

12 月下旬 Bunkamura オーチャードホールほか

ロシア映画祭 <最新ロシア映画一挙上映>

日時;10 月 17 日～25 日 19:00～21:00
会場;ユーロライブホール(東京・渋谷)、ロシア大使館(予定)
会費;500 円(自由席)
主催;ロシア映画祭実行委員会

第 1 回ロシア文学読書感想文コンクール

「私のトルストイ」

課題作品:トルストイ作『幼年時代』(中学生の部)
『復活』(高校生・大学生を含む青年男女の部)
応募資格;中学生・高校生および 23 歳未満の青年男女
応募期間;2018 年 8 月 24 日～9 月 7 日
(9 月 7 日の消印有効)
提出先;NPO 法人ヘラルドの会
住所;107-0062 東京都港区南青山 2-2-15-502

審査員;(敬称略)

金沢 美知子(日本トルストイ協会副会長・東京大学名誉教授)

三浦 正巳(日本トルストイ協会理事・事務局長)

伊東 一郎(早稲田大学教授・ロシア文学者)

宮腰 尊史(新潟放送・東京支局長)

阿部 昇吉(作家・スラヴァ書房代表)

鈴木 芳子(翻訳家・ドイツ文学者)

入賞発表;10 月末日

表彰式と朗読鑑賞の集い

日時;2018 年 12 月 9 日(日) 14:30 開場 15:00 開演
会場;東京・両国 シアターX カイ
入場料;1000 円(全席自由席)
主催;NPO 法人ヘラルドの会
(連絡先;E-mail herald@jd5.so-net.ne.jp)

ロシア・アムール州 イワノフカ村 少年少女合唱団 招聘へのご協力をお願い

2018 年はシベリア出兵から 100 周年に当たります。この干渉戦争で日本軍に虐殺されたアムール州イワノフカ村への慰霊と第二次大戦でのシベリア抑留死没者鎮魂の旅を続けてこられた岐阜の横山周導さん(NPO 法人ロシアとの友好親善をすすめる会理事長)から、イワノフカ村の少年少女合唱団を日本に招聘するために、資金協力の依頼状が届きました。

ご協力いただける方は、一口 5000 円で何口でも可能な範囲で是非ご協力をお願いいたします。

イワノフカ村少年少女合唱団 招聘のための資金協力
振込先:郵便口座 00840-9-99367
名義 ロシアとの友好・親善を進める会

*以下、横山周導さんからの依頼文をそのまま掲載します。

拝啓 突然のお願いで、誠に失礼でございますが、よろしくお願い申し上げます。

NPO 法人「ロシアとの友好親善をすすめる会」は、2007 年 4 月、岐阜県の許可を得ましてから今日まで、イワノフカ村の日露共同追悼碑と周辺の日本人墓地への参拝を続けています。

2018 年は、日本軍のシベリア出兵 100 周年に当たり、イワノフカ村の虐殺も同様であります。

1991 年(平成 3 年)元の全国抑留者補償協議会会長・斎藤六郎氏が、次年度墓参する日本人墓地を探して、たまたまいワノフカ村を訪れた時、当時の村長ウス氏より、貴方はこの村を知って来たのか、知らずに来たのかと問われました。斎藤六郎氏が全く知らずに来たことを告げると、ウス村長は村の二か所の記念碑を案内し、イワノフカ村がシベリア出兵の日本軍によって虐殺された村であることを話されました。

斎藤六郎氏は、ロシアに対し大きな恥を感じ、日本政府に強い不信感を持ち、シベリア出兵についての真実を学ばれました。

そして 4 年をかけてイワノフカ村長ウス氏と話し合い、1995 年 7 月、遂に日露共同追悼碑の建立により恩讐を超えた和解となりました。

ところが同年 12 月 28 日、斎藤六郎氏が急逝され、翌年の墓参が出来ませんでした。1997 年、会長夫人・斎藤次子さんを中心に有志を募り参拝し、これを前例として毎年墓参を続けてまいりました。この間、ウス村長より少年少女合唱団の日本への招聘の申し入れがありましたが、有志の集団でしたので延ばしておりました。

2006 年の墓参の折、墓参者の中よりこのような大事な行事を高齢な人に任せるのは大変だから、NPO 法人を作ろうという声があがり、法人を作ることとなりました。



写真は、日露共同で建立されたイワノフカ村共同慰霊碑

帰国後、早速発起人会を何回も開き、12 月には「NPO 法人ロシアとの友好親善をすすめる会」の設立総会を開くことができました。翌年 4 月には岐阜県の認可もいただき、以後、毎年墓参を続けてまいりました。

最近、元揖斐郡坂内村の軍人の日記が発見され、シベリア出兵の詳細な記録が多くの新聞に取り上げられ、シベリア出兵百周年の声が高まってきました。

当会としましては、既に 90 年法要を致していますので、この年を逃しては意味のないことを考え、イワノフカ村少年少女合唱団を 2018 年 7 月 3 日より 8 日まで招聘することに致しました。

それにつき、当会では 10 年前より準備金を積み立ててきて、今年で 180 万円の基金となりましたが、招聘の予算が約 350 万円でありますので、なお多くの資金が必要です。

以上のような事情でございますが、ご理解とご賛同を賜りたくよろしくお願い申し上げます。

NPO 法人ロシアとの友好・親善をすすめる会
理事長 横山 周導

*なお、来日するのは、少年少女合唱団 10 名とイワノフカ村オリシェフスカヤ村長ほか合計 13 名です。7 月 3 日～7 月 8 日の滞在中に、岐阜県・揖斐川町でコンサートを行うほか、揖斐川町や鈴鹿市の小中学生と交流会を行う予定です。

横山周導さんのシベリア抑留体験とこれまで続けてこられた『慰霊と墓参』の活動については、本紙第 193 号掲載の講演録をご参照ください。

また、ロシアとの友好・親善をすすめる会では、今年 8 月にもシベリア出兵 100 周年・イワノフカ村への慰霊と墓参の旅を企画しています。

日程:8 月 21 日～28 日

旅行代金:248,000 円(最少催行人数 20 名)

企画:NPO 法人ロシアとの友好・親善をすすめる会

旅行手配:ジェーアイシー旅行センター株式会社